

工作学習における生徒の造形的興味

中 野 満 男

教育目標に達するためにはいろいろな道があり、又その道のたどり方にも様々な方法があるであろう。とくに、知的教科と異ってその目標に抽象的な部面の多い図工科では、それは複雑をきわめていて、そのために実に数多くの主義主張が行われている。

ともかく図工科の目標の根幹の1つに、創造的な表現というものがあれば、当然興味ということが最初の問題となり、これが創造意欲をもやし、そして造形表現を誘発させるものとなる。

「興味」は、直接的には授業面での導入段階の巧拙によって左右されるし、学習以外の面での刺戟にも大きく影響されるであろう。しかしその前にあるものは生徒がもっている潜在的な興味や関心であり、こうした刺戟を受けやすい面を知ることが教師にとって必要になるのではないだろうか。こうしたことを究明したい気持がこの研究の動機であった。

ある小学校での調査によれば、小学校低学年の児童は描画を好む、高学年になるにしたがってその度合が少なくなってゆき、特に4、5年生頃にその傾向が著しくなり、一方工作的表現は逆に高学年にゆくにしたがってこれを好む度合が著しく強くなることが明らかにされている。

描画におけるこうした傾向はすでに一般的に明らか事実とされていて、その原因の大きなものは、学年が進むと自分の作品の上手、下手がわかることにあるといわれる。しかし工作的な表現にあっては、高学年の生徒であっても上手下手ということはあまり問題とせず、下手でも創作に夢中になるものが多いようである。そして次第に科学的な原理をもつ工作へと進む傾向が強くなってくる。中学校においても一般にこの小学校高学年の状態が変らないで残るものではないだろうかと思われる。

こうした考えのもとに、とくに工作的表現の面で、生徒がどんな種類のものを好み、どんな傾向のものに造形的意欲をもつかということを調べてみることにした。

この研究は次の2つの調査によった。

1 教科書の教材興味調査

教科書には色々な描画や工作の教材が参考作品の写真や図版を附して掲載してある。

「この中でどれを描いて(作って)みたいか。やりたいものをいくつでもよいから選びなさい」という質問形式の調査。

この場合困ることは、学年によって教科書がかわるので、学年による傾向の変化をみることは期待できない。又各ページの参考作品にはいろいろの差があつて生徒の表現意欲を刺戟する点で全部が同じ程度であるとは限らないことである。だから結果にあらわれる数字はかなり顕著な傾向を示すものでない限り判断の資料とすることはできないし、又教科書ともならみ合せてその結果を検討しなければならないものと思う。

又この調査の結果は、現在までのいろいろな学習、とりわけ図工科の学習内容や更に生徒をとりまく環境によって強く影響されるものであろうから、その統計的傾向は、本校における実態として個人的に参考にするためのものであつて、決して一般的なものとはなり得ない。

2 「作りたい工作の設計図」による調査

これでは、各学年とも、自由に作りたい工作を考えさせ、その設計図をかかせてみた。そしてその図について、次の7通りの分類を試みた。

- 1 科学的意識と美的意識との関係
- 2 動く工作と動かない工作
- 3 空想性と現実性との関係
- 4 その工作が用いられる場所
- 5 事物の分類
- 6 独創性の強弱
- 7 材料や技術を意識する度合

この調査の不純な要因になると思われるものは、それは全然制約を与えずに考えさせたので、作ってみたいと考えた気持の中には、色々異った種類があると考えられることである。例えば、乗物を作りたい。という者の中には「すばらしい形をした物をつくりたい」

「動くものをつくりたい」「操縦したいから」「それによって旅行したいから」「出来ているものは高く買って買えないから」等いろいろ異った目的によることが考えられる。その中からは純粋に造形表現的意識から生れたものだけを選び出すことが出来ないということになる。その点で、この調査は不完全なものであってあらためて周到な計画に基いた研究を行わなければならないのであるが、今回はそのための前段階としての極めて大ざっぱな傾向を知りたいために行ったものである。

又、この調査も、その結果が一般的なものではなくて、あくまで方法論であることは、前の調査と同じである。

さてこのような調査によって知り得た工作的表現の興味に関する傾向を記してみたい。

(1) 教科書による教材興味調査によれば

イ 生徒は技法的に変化のあるものを好むようである。つまり、かわった、まだやったことのない技法を用いるものを好む。例えば、3年生の「石膏レリーフ」、2年生の「やきもの」等に希望者が多い。したがって新しい技法というものは、表現のための抵抗になるというよりは、むしろ表現意欲を刺戟するために役立つことが出来るということが考えられる。

ロ 生徒は彼等の生活に関係のあるものを好む。例えば2年生の住宅の設計や模型の製作、3年生の建築デザイン等は男女の別なく好むものが多い。しかしありきたりの手工芸品、本立て、状さしなどはあまり好まない。とくにスケールの小さな趣味的な工作は、女子が多少興味を示すもの男子にはほとんど好む者がない。又、純粋な抽象的構成はあまり好まない。

ハ この調査は、無記名で、あげる数も規定せず、「何も作りたくなければ1つも書かなくてもよいし、作りたいものがあればいくつあげてもよい」と言って書かせたものであるが、1人あたりのあげた数の平均は、1年生3.7、2年生3.5、3年生3.4であり、高学年へ行ってもそれほど減少しない。これは高学年になっても造形的な表現意欲がおとろえないことを示すものではないだろうか。一般に高学年に進むと創作的表現活動が不活発になると言われているのは、何か他の外部的な原因によることが大きいのではないかと思われる。

(2) 「作りたい工作の設計図」の7通りの分類集計によれば

イ 科学的工作と美的工作(図A, B)

ここで、科学的とか美的とかいう言葉は必ずしも正確ではないが、この場合便宜的に用いたのである——設計図を、科学性又は便利であるように工夫する要素をもった工作と、美観を主目的とした工作と、この2つのものが相加した工作とに分類してみると、2つの要素を併せもった意図によるものが多い。例えば、乗物(実物又は模型)で動き、かつ形や色も美しくデザインしようとするもの、便利で美しいようにとデザインした住宅、学校、都市等がある。純然たる科学的工作や、美観だけを目的とした工作は、これにくらべるとはるかに少いが、男子が科学的、女子が美的工作を好む傾向はあるようである。

ロ 空想性について(図C)

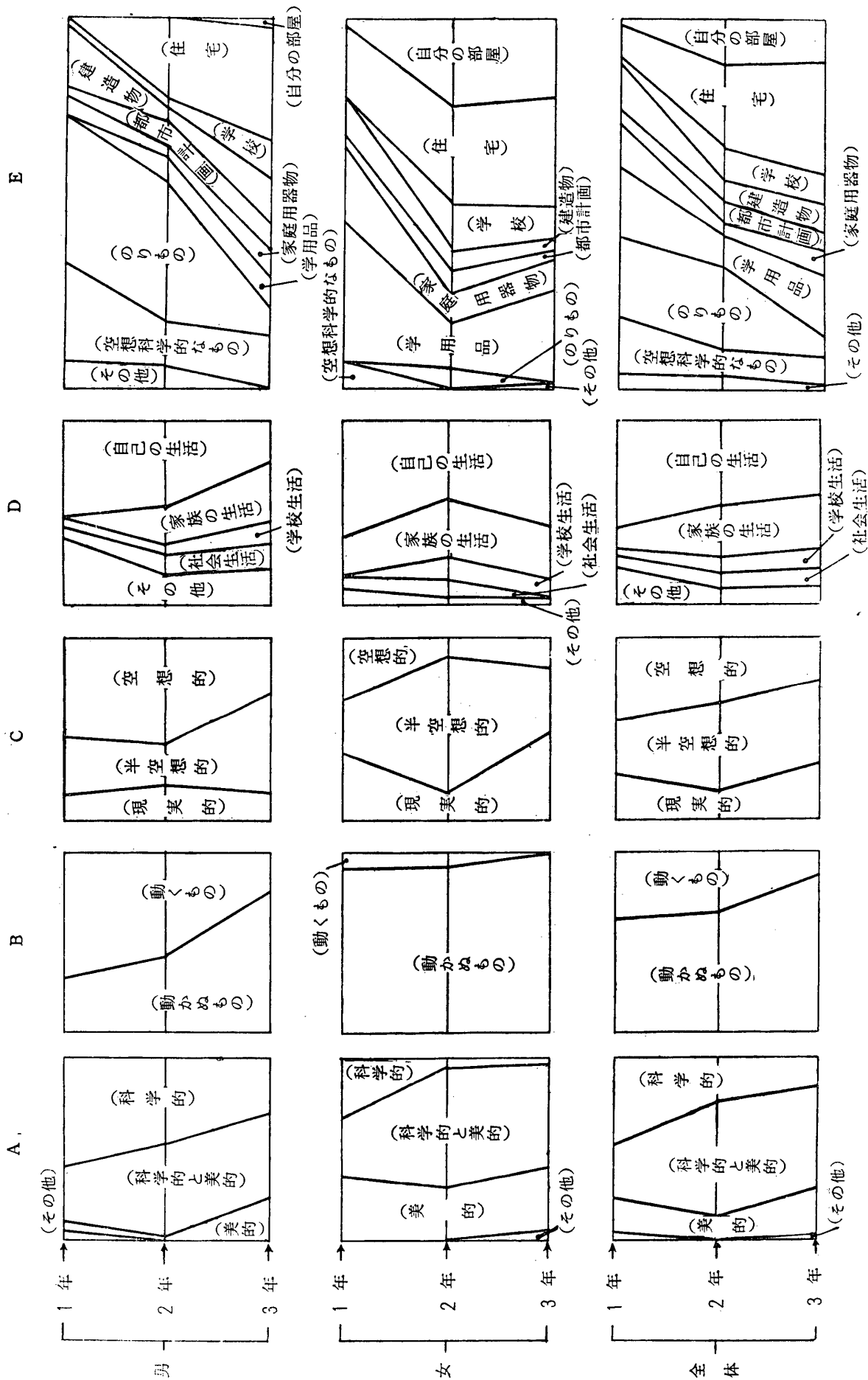
低学年に空想的なものが多い。高学年でもそれは以外に多いが、それでも次第に現実性をおびてくる。作る事物もそうなるが、同じ種類のものであってもその傾向を帯びる。例えば同じ住宅の設計にしても、低学年では動く家、飛行出来る家、球形の家等、空想的なものが多く、高学年になると普通の家が多くなる。概して空想性は科学性と結んで男子の方が多い。

ハ 造形意欲の起きる場(図D, E)

作られたものが使われる環境を考えると、やはり多くは自己の周辺に関してこれを豊かにしたいという願望から生まれるものが多い。特に女子は自分の部屋、周辺におく道具や装飾品の類等が多い。男子では同じように自分の生活の周辺から発するものでも、スケールが大きく動的な傾向がある。

ニ 独創性についてはほとんど分類が不可能であり材料や技術の意識という点でも特徴があらわれないので省略した。

しかし、この研究は明確な仮定に立って行ったものではなく、前述の様に今後の研究のための瀬踏みの意味をもって、ばく然と行った調査の中から特徴のある事項を抽出したものである。したがって調査の計画には不備な点が多いので、この結果は直ちに確定的判断を下すための資料とはならない。これを実際教育の面に参考としてとり入れることの出来る形にまでするためにはなおこの研究を長くつづけなければならないであろう。



工作学習における生徒の造形的興味

この調査の結果は、生徒の造形的欲求について、おぼろげながら感じていたことと符合したり、あるいは意外な差違を示したりした。そしてある程度は工作指導の方向に暗示を与えるのではないかとと思われる。

現在の工作教育は専門化しすぎた美術、もしくは目的を持たない技術を与えることになっているのではないだろうか。教育面での「用と美」に関係した問題がまだ完全に解決されておらず、又芸術と科学をいかに融合させるかということもまだ懸案のままになっているが、あまり芸術や科学を専門化せずに与えることを考えるところに解決法が見出せないであろうか。一般教育のこの年代では今よりももっと未分化な、一見もっと幼稚な形の方が健全であり、それはまた創造的な

性格をのばしながら

意図→知識と技術の総合、企画、選択→適応→工夫
→統一

というような大きな総合的な働きの訓練をするためのより広い場所が与えられることになり、発展性にとんだ工作教育になるのではないかとと思われる。

幼児の造形活動が、美術ではなくて、生活の感情や意志や知識や技術の総合的な前進と共に行われるために、この時代が造形表現の黄金時代と言われるけれども、この黄金時代を小学校高学年から中学校まで延長させることが可能ではないかということも考えられるのである。